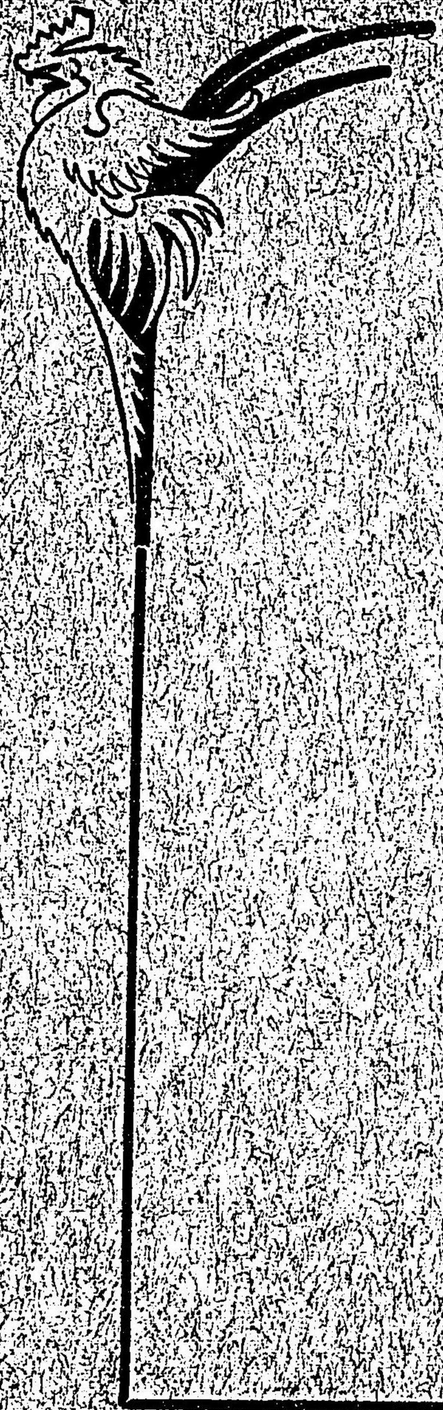


花

鳥

268
320

特50
428

Imprimerie Saint-Joseph, Osaka

大阪司教儒利譽准

Imprimatur.

✠ Julius-Augustus, Episc. Osak.

Osaka, die 16 *Sept.* 1911.

はしがき

主禱文の凡ての願を玩味するならば、神の我等を愛し給ふことの如何に深くあるか、感謝するに餘りある。

先最初の言を瞑想して限りなき信頼の心を起す、「天に在ます我等の父よ」と呼ばゝる時に、我等は愛の淵に疲勞れたる心を浴し、其懷に抱かれて其溫情に萎ゑたる魂は悠々と蘇生るやうな心地がする、一種いふにいはれぬ懷しさに心動いて、心中の有丈を訴へて重荷を下さうとする、また必要を感ずる凡ての物を遠慮なく求めることが出來る。

此本文の要旨たる「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ」といふ願に就いて、佛蘭西の有名なる司教ボスエ博士の言に、

此の願は其父に信頼して些細なる入用をも求めんとする子たるものゝ願である。あ

あ我等の父よ父は我等に死すべき身體を與へ給ふた、併し此は我等人間が、汝に背いて、受けたる罪なれば呟くことは出來ない、此弱き身體は日々に糧を受けて養ふことがなければ、衰弱と死滅を免かれることは出來ぬ、されば慾に任せて貪ることなく、質素にして必要だけを與へ給へ、さうして此糧は父の惠によつて受けることを悟り、父を信賴して其糧を依賴し、感謝を以つて此を受けるやうに」

とある、眞に我等は如斯な心で祈らねばならぬ。

我等が求むる糧は啻に肉身を養ふものばかりでなく、猶ほ他に一種のパンがある、此は靈性的のパンであつて魂を養ふに必要なるものである、身體の爲めに取る糧が身體を養ひ、其命を保つ如くに、魂の糧は靈的生活を健全にして、我等を生かせる、人は肉と靈とよりなるものであるから、糧も亦二樣でなければならぬ、肉は亡ぶるもの靈は不滅のものであるから、靈の糧を以つて吾人は永遠に生きねばならぬ、靈魂の糧とは何であらうか、即ち御聖體である、キリストは「我は生命のパンなり」と宣ふ

た、キリストを食するものでなければ、長に生ることは能ぬ。

此事についても前述のボスエ博士の言はれたことがある。博士は其美しい言辭を以つて主禱文を讃美せられた中に

我等がミサ聖祭に與る度毎に、聖體を受けるならば此上ないことである、「卓の上に種々の御馳走が整うても客は足らない」、とイエズスは申された、イエズス樣よ主は神の國に食せしめんとして我等を招待し給ふ、我等は其パンを熟望して受けねばならぬ、凡て義を求むるに饑ゑたるものゝ食を求むる如く、渴する者の水を欲するが如くならば誠に幸福なことである、神は如斯る者に有らゆる聖寵を下し、榮の冠を與へ給ふ、我等が愛德を完備せんと思はゝ屢々キリストを受けることが最上のこ

とである、

と、誠に人は靈のために饑渴を感じねばならぬ。

主禱文を誦へるに當つては、常に信じ且つ望み喜悅を以つて誦へねばならぬ、又莊

かにして尊敬の念がなければならぬ、其一つ〳〵の願を默想しつゝ願ふならば神は其求を容れ給ふ、神の思召は如何なる場合にも永遠の救に導かんとし給ふものであつて、又我等の弱さを知り給ふが故に此世に於ける日々の糧のためにも彼に求めよと勸め給ふ、嗚呼大慈大悲なる神の攝理は畏しとも畏きことである。

危難

(一)

師走の末つ方、烈しい山嵐は吹雪を卷いて、舊びた破れ窓の隙から、皮膚を擘くやうに吹き込む、風雪が募るまに〳〵、霜夜の虫の如く細り行く嘆き聲は、いぶせき二階の中から洩れる。

「母ちやん寒い……」

憐れなる母は成る丈小娘を自分の破れた着物の狹い襞積に包ひやうにする、薄暗い部屋の隅にじつとして動かないで居る九歳位な男の子の痩せた顏を母は涙と疲勞に打ち凹んだ眼をもつて見る、息子は默して泣く、時々苦しい聲を出して

「お腹が減つた、パンおくれ、」

と訴へる。パン！火！これこの親子に必要なものであるが、暖爐に一塊の火もなく、

戸棚に一片のパンもない、此苦痛を知らないで、すや〳〵眠つて居る赤子が夢現に一人微笑して居る。數日前から寒さが俄かに強くなつた爲めに、餘程前から辛うして凌いで居る種々の困難は今に至つて如何ともすべき術なく、饑ゑ凍ゑが此家族を苦しめる。

三人其儘動かずに身體を固くして居る、母は此可愛い二人を如何したら育てることが出來やうかと思案にくれて居る、其處へ開きなれた跫音が階段に聞ゑる。

「お父さんだ」

と二人の子は同時にいつて、母の顔を見た其眼は、希望の色に冴えた、父がパンを持つて歸つたのであらうと想像したからである、二人は飛び上つて室の戸の方に走つて其戸を開放した。

「お父さん、何にか食べるものがありますか、」

室に入らんとする男は啞び聲を塞らせながら、

「オ、可愛らしい子供よ、わづかばかり……」

と低い聲でいつた、さうして其袂から泥に汚れた黒パンを少し出して

「これは溝の中で拾つたものだ、誠に汝等は可憐さうなものだ、これだけがお前たちの食事だ。」

といつて敢へて其パンを子供に渡さないで居る、二人の子供は其パンを壓へて放さない、とう〳〵取つて齧る、これを見た母の窪んだ眼に涙が溢れる。夫を見上げて

「病院にお行でゞしたか、」

と聞く、

「行つた、繃帶を直す爲めに、」

繃帶掛けた片腕は首から吊つてある、

「醫者は何う申しましたか、」

「繃帶を取るまでには少くとも、もう一月かゝるさうだ、元の通り手を使ふといふ

ことは二月の後でなければならぬ、

「二月？まだ二月ですか、良人の働きの出來なくなつてから四箇月ですが、

男は大息して、其悲しみを表はすまいとして包んで居るが、女はよく其心を知つて居る、平常より貧しい生活の家に、働くべき一人男が働けないのであるから、忽ちに窮して來る、十二月の寒い時節であるから特に苦しみが甚だしい。

「お前は何を食るのか、

と良人が其妻を氣の毒さうに見る、妻は無頓着な調子で

「私はどうでもよろしうございます、此子供等を……

「ヨゼフは寢て居るか、

「ハイ今朝隣家のお内儀さんから貰つた牛乳に戸棚の隅に殘つて居た僅かのパンを入れて、朝の食事にしてやりました、食べてから直に眠りましてまだ起きません……しかし晝飯には何を食べさせませうか。

親子皆互に身を縮める、二人の子供は繰り返していふ、寒いよ……お腹が空いたよ……親は慰める言葉もなく、あはれに彼等を眺めて、只失望するばかり、此子供を救べき術を見出さない、まして今年の寒さは例年に比べて稀な寒さである、見渡すところ何處も雪に埋もれて居るから、困難はなほ凌ぎ難い、併し此十二月の末はまた最も嬉しい時で、人々は互に贈物を交換して幸福を祝賀する時分で、最早五六日すれば新しい年を迎へる。

ヤコブ、ウエルニイは其妻に近寄つて、失望の溜め息をして

「ルイズ、また家賃を拂はねばならぬな、

「何うしませうかね、

と若き妻は嘆きに嘆く、男も失望が極に達した風で、

「何うするつて、何うすることが出來るものか……五圓の金どころか一文も手にない、お前も知つて居る通り此貸家では一月でも家賃を拂はない者を置く處でない。

「併し私どもは今まで一度も……
と妻は云ひ出したが、夫は直ぐに打ち消した、
「さう〳〵私はよく知つて居る、隣の者は三月前に追ひ出されたぢやないか、ユデア人のあの家主に憐みの心があるものか、
ルイズは手を拱んで考へる、其手の上に大きな涙がハラ〳〵と落ちる、
「私どもが此寒さに追ひ出されるのでせうか、三人の子供を連れて……此處は火がなくてもまだ家の内だからよいですが、外に出されて何うなりませう、私は今から行つて家主に頼みませう、事情を話したら憐れんでくれませう。
俄に決心したらしい樣子で立ち上つた、其頭にショールをかけて出かけやうとする、
夫は見て何處へ行くか、
と聞く、妻は涙の目を夫の方へ向けて、
「家主へ相談に行つて來ます、すこしの間此家に置いて呉れるやうに嘆願しませう

良人の怪我仕事の出來ないこと、また今の困難や小兒を連れて居ることなどを話して見ませう、同情して呉れるかも知れませんから、
ウエルニィは頭を打ち振つて
「駄目だらう、無情の人間で金ばかり拜んで居るのだから、
ルイズは失望の顏で茫然と戸外を眺めて居る、雪は小止なく吹雪いて、人の往來もさすがに少い。
「ルイズ、萬一首尾よく行くかも知れん、失望せずに行つて見てごらん、
と奬勵す良人の言葉に女は、決心して、寒さに震ふて居る子供を抱き締め、眠つて居る赤子に、そつと頰摩りして家を出た、戸外の寒さはまた別してゞある、着物は薄いし昨日から食べずに居る身體はふら〳〵して雪路に蹌踉く、息が切れて足が進まなくなると雪を嚙んで口を濕しては歩く、年末の市場は見る目も絢に美を競うてあるが、
ルイズはこれに目を注けない、財布は空で淋しく寒い二階に泣き暮して居る子供の爲

めに何一品買ふことが出來ないと思ふと、多くの飾は徒に其心をなやめるのみである。

家主はブランキ町に贅澤な住居を持つて居る、其隣家は自分の支配して居る銀行である、今時分此銀行に行つたならば、家主の主人に逢ふことが出來るであらうと思つてルイズは、其銀行の前に立つた、此處に出入するものは自分のやうな、見すぼらしいものは一人もない、入らうとしてはまたも躊躇ひ、幾度も其前を往來して居る、斯くてはならじと我れと我が心に鞭つて、重い扉を押した、中は四方の玻璃戸に屈折して烈しく入る光線に、隅から隅まで明く、幾個の金庫の金具が燦として眩ゆき迄に其目を射る。ルイズは明い室に這入つて着物の垢身體の汚れが特別よく見えるので、身を縮めて腰掛の端に身を寄せた。年末の爲め人の出入は多く、幾百圓幾千圓といふ金を取出したり、また預けたりする人ばかりだ、向ふの一段高い處に立派な客と應對して居るのが主人である、何人に取り次いで貰はうか、否決して取り次はしてくれまい、

と胸はどきくする、目はたゞ主人の方にばかり注ぐ、行員も出入の人々もルイズを見て胡散らしい目附をする、其度毎にルイズの顏に朱が漲る、斯く心を苦しめて居る中、仕合にも主人は客を送るために、上靴のまゝ出入口まで出て來た、客に挨拶して入らうとする主人の後から、ルイズは言葉を掛けた。

「旦那樣！、恐れ入りますが少しお話致したいことがございます、何うぞお聞き下さい、

と腰を屈めて賴む、

「何？

と兩手をポケットに入れて傲然と顧た其の眼は、血も涙も湧きさうには思はれないルイズはまたも

「旦那樣折入つてご相談致したいことがございまして、○○町から參りました、

「此處へ來い

といつて主人は人の少い空た机の處へ行く、ルイズは後に尾て行く、
「何の用か、早く簡單に云へ、私の時間は金だ、特に今節季だ、ぐず〳〵して居れないから、
と慳貪にいふ、ルイズは耻らひと心配に身體に冷い汗が出て居る、
「旦那樣！外ではありませんが、○○町のヤコブ、ウェルニイの妻でございます、最早二三日でお家賃をお拂ひ申さねばなりませんが……
「私に金を拂ふのでない、それがために差配人がある。
とルイズの言葉を皆まで聞かずに主人ヒセルは情なくいふ、ルイズは言葉柔かに、
「ご道理でございますが、悲しいことにはお拂ひ致すお話ではございませんで、暫時ご猶豫を願ひたいのでございます、
主人は眉を顰めて、何にも言はぬ、ルイズは事情を述べ始める。
「私の亭主は紡績に働くものでございまして、先日機械に卷かれて右手に怪我を致

しました、仕事を休んでからもう四月に……
「さう〳〵何時も同じこと云つてくる、
「ご猶豫願つたのはこれが始めてゞございます、
「何時も皆んな同じ文句を並べる、
「仕事はやめて居ます、養はねばならぬ子供は三人まで居ます、
「フン仕事を休んだとか、困難だとか、病氣だとか、子供とか、
主人は次第に聲を荒くする、
「さやうでございます、養はねばならぬ小供が三人ありまして、其中に小さいのはまだ乳呑子でございます、萬望彼等を憐れんで下さいまして暫くお待ち下さいますれば、其中に亭主の手も直りませうし、常のやうに仕事が出來ますれば、直にお拂ひ申します、
「さうして拂はぬ家賃は幾月も積つて來る、うこで如何な結果になるか私はよく知

つて居る、それが爲めに私の主義は始めから、少しも猶豫しない、一日も待たん、
其言葉には非常に力が這入つて居る、
「拂へ！或は私の家を立ち退け！、
「旦那様、ご無理でございますが、私の小さい小供のことを思つて下さいまして…
「私は同じことを二度云はぬ、
主人は起ちかけて、
「も一度云ふ、私の時間は金ほど大切だ、お前は無闇に私の貴い時間を費させる、
と云ひながら、靴音高く其席を去つて了つた。ルイズは、一縷の信頼も全く絶えて、
落膽やる方ない、涙を押へて出やうとする、出口の人々はまじ〳〵顔を見るので消え
も入りたい思ひがする、行員は忙しげに金の計算をして居る、金銀貨の音を耳に聞き
ながら扉を押して外へ出た。
熱い涙は頰を傳へる、寒い風は骨にまで沁み込んで足先手先には全く感覺がなく、

目は涙に暗んで道は見えない、足も力なくて時々轉ぶ、轉んでも手が萎えて居て身體
を支へ起すことが六ケ敷い、聲を立てまいと思つても、咽は音に出る。
「家主は金持で少しの間家賃の五圓を貰はなくても困りはせぬ身分であるのに、何
うしてかくも無情であるか
とルイズは嘆く、ヨゼフは目を覺して泣いて居るであらう、二人の子は寒さと餓さに
苦んで居る、何うすればよいか、と思へば足がなほ重くなる。ルイズは人の心をまだ
よく知らなかつた、金を拜むものは其心は石の如くなつて、人に憐みなどいふことは
露はゞもない、世に財をもつて神のやうにして居る者の多いことをルイズは知らない
聖書にもいつてある、「曾て一人の富豪あり、緋色の布と亞麻布とを纏ひ、日々奢り暮
らしたるに、又ラザルと云へる一人の乞食あり、全身腫爛れて富豪の門前に偃し、其
食卓より落つる屑に飽足らん事を欲すれども與ふる人なく、而も犬等來りて其腫物を
舐り居たり」といふことがある、此家主ヒセルもまた此無慈悲なる富豪と同類である

ルイズには如斯經驗がなかつた。

○○町にはヤコブが其の妻を待つて居る、少しばかり希望して居たルイズの心は、ヤコブにも移つて、もしや家主が同情して呉れるかと思つて、待つて居る、ろこへ歸つて來た妻の青い顔を見て、もう駄目だと知つた、

「不承知だつたな、

とヤコブは先づ言ふ、ルイズはたゞ首を垂れて重い身體をどつさり室に投げ入れる。

「ろんなら、最早頼むべきものは一人もない、

と男ながらにヤコブも此世を暗に思ふ、此夫婦は世を照し迷へるもの救ひ給ふ神あることを忘れて居る、數年前から天に在す慈悲深い父を何とも思はない、毫も神を信頼するといふことがなかつた、又小兒にも神の話をしたことは一度もない、今日まで此家族は現世の爲めにのみ生活し肉體のみに生きて居た。

其住居つて居る二階の壁を見渡しても、尊きキリストの十字架がない、希望を超す

べき神の光がない爲めに、一層に淋しい、新禱の習慣を失つた彼等の口には神に向つての呼び聲、神に向つての頼の言葉は出ぬ、「イエズス我等を憐み給へ」といふ依頼をせぬから、困窮に出合つて、全く失望するのである、我等の涙をば計り知りたまふ神に依頼しないから、其涙の乾くことがない。

ヤコブは沈默つて何事か深く考へて居る、何にかに甚く其精神を奪はれて居ることがわかる、額を縮め目を閉ぢて居る有樣は常でない、烈しい心の戰は終に其口に發した。

「ルイズ！最早仕方がない、安心する道はたゞ一つだけだ。

「何ういふ道ですか聞かして下さい、一つでも方法があれば十分です、私はろの爲めに如何樣な辛苦をも忍びませう、小兒の此苦みを見て居れません、

「ルイズ！

ヤコブは逆上したらしく眼を赤く異樣に光らせて、妻を呼びかけ、

「此世を去らねばならぬ、お前に死ぬる勇氣はないか、
「何をいふのですか、良人氣が狂つたのですか、此小兒をすて〻？此小兒は何うなりますか、
「皆な一しよに死ぬる、此火鉢の中へ炭を熾して此部屋を密閉ておけば、炭酸瓦斯の爲めに皆死ぬる、
「いーゐ〳〵
とルイズは泣き出した、
「復連が向いて來ます、この苦しい峠を越せば、また樂になりませう、勇氣を出して辛抱して下さい、此愛らしい小兒を其儘殺すことが出來ませうか……
「私に辛抱はすこしもなくなつた、死ぬ方が安心ぢや、ながくはかゝらない、苦しみもなしに夢中で死ぬるよ、……小兒も其通りぢや、さうして此世はこれで終るのだ、こんな酷い世の中に永へて無邪氣な小兒等を苦めるよりは……」

此男は心配の爲めに憂鬱狂に罹つた、自害せんとする心が起つて自らこれを抑へることが出來ない、この考を防ぐ爲めの信仰といふものがないから自らの悪い考は悪ふまゝに進んで止まるところがない、妻も亦良人に「死は一つの安心である」と云はれても、たゞ其死を恐れるといふだけで、自殺は神の權威を蹂躙るので、我等の生命は神のものである、自分勝手に其玉の緒を絶ち切るといふことは大きな罪である、神は思召次第に我等の生命を與へまた奪ひ給ふ、我等これに服從しなければならぬ。其道理を說き得ない。

ヤコブ、ウエルニイは失望して居る時に終に悪魔の勸めに耳を傾けて、益々其心を奪はれて了つた、ルイズも次第に良人の讃つた考の方へ傾く、死を以つて今の苦痛を免れやうといふ論法に同意するに近いと認められる。

（二）

ヤコブは餓ゑたる妻子の中に坐して、死に誘はれた物凄い目附で熱心に其妻を説いて居る、其時ヨハネは立ち上つてろつとマグダレナの手を取つた、賢い性質でまだ幼少から乏しい生活に種々の難義を味つた爲め、物事をよく悟る、今自分等家族の上に非常な難義が起つて居ることを知り、また其難義は父母も何うすることの出來ないまでに窮して居るといふことも分つた、此上は何處かでパンを貰はなければならぬと決心した、小さい妹に向つて、

「マグダレナ、パンを貰ひに行かう。

寒さに震ふて居る妹はこれを聞いて、欣然立つた、二親は恐しい相談の時で二人の子供の方は無頓着であつた、終に二人は手を取つて階段を下り戸外に出て行つた。

町に出ると吹雪は容赦なく此憐れな二人の子供の身體を弄んで、全身は見る間に眞白になつて了つた、目も見ねなくなる、外套も手袋もない身體はガタ〳〵震ふて齒

までがガチ〳〵する、眞赤になつた手の甲を吹き〳〵歩く、マグダレナは終に泣き出して

「寒いよ、母ちやんのところへ歸らう、

といつて道に止つて歩るかない、

ヨハネは寒さに屈せず、妹を宥め其細い手を曳いて、

「内へ行つてもパンがないのだらう、も些我慢せい、パンを取つてから歸らう。

マグダレナは目を擦りながら

「兄さんパンの處はまだ遠いの、

「さう遠くないだらう、さー行かう

歩きながら二人は四邊の樣子を見ると、寒い天氣であるのに年末の爲め人出が多い、婦人等は毛のついた革衣に包まれ、男子は溫かな外套を着て居る、小供等も毛の手袋革の足袋を穿いて溫かさうにして勢よくまた愉快さうに歩いて居る、二人の小兒は

其有樣を見て、他人は皆幸福であると羨しい目で眺と見る。

店さきからは甘しい食物の香が流れて、空腹の彼等を嬲り、美しい飾りが輝いて窮する此小供を笑ふ、今クリスマスと年玉の出入する時であるから、何れの店も小供の目を引くものばかりである、果物、菓子、衒具等堆く店先に出て居る、ヨハネやマグダレナのまだ見たことのない衒具類も數々其目に止る、二人は圓い目を見張つては驚いて眺る。

「お父さんが働いて居なさつた時は、私等も年玉を貰つたねー、ソラ去年は新しい毬の綺麗なのをねー、お前も覺えて居るだらう、

「忘れた

とマグダレナはいふ、

「兄さん風船は何うしたの？

「あれは破れたよ、

北風はまた一しきり強く涙の頰を鞭つ。

「兄さんパンの所は遠いの？

とマグダレナは風に背くやうにして立ち止まる、涙は頰を傳へる、ヨハネは答へずに妹の手を握つて進まうとする、妹は蒼ざめた顏に目ばかり赤くして、

「母ちやんのとこへ歸らう、

と泣く。二人は目的もなくたゞ歩きに歩いて、内からは隨分遠いところまで來た、ヨハネは止まつて四方の町の樣子を見るに一向に何處か分からない、方角も知れない何處かとなほ注意をして見渡すうちに、宏大な建物が目に附いた、其入口は開放されて居て、奥深い彼方から澤山な光が洩れる、また其中は何となく温かさうな感じがする、調和した美しい歌が、高雅な音色を以つて此家から流れ出る、車馬の音蹄々と人足の繁しい浮き立つた此町に、幽韻な樂が憂世氣遠く注ぎ入る。

「此家は綺麗だねー兄さん、何處の内ね？

「これは聖堂といふんだ、嘗かお母さんから聞いたよ
「聖堂？其中に何があるの？
「知らんよ
「聖堂は誰れの内？
「王様の内だらう、本統に綺麗だよ、燈が澤山あるねー
「這入つて見やう、兄さん！
「厭だよ、人に責られるよ
「些暖りに行かう！兄さん、
兄は此美しい家に入るならば、直ぐに追ひ出されると思つて心配する、其時此階段を上つて聖堂に入る人を見ると、其中には自分とマグダレナ程粗末な衣服を着た男女の小兒もあるのを見て、恐れなく入つて行かうかと決心した。
決心して進んだが、やはり怯しながら靜に階段に上つた、聖堂の中は跪いて居る

信者で充實である、終に中まで入つた、此小さい外教人は聖堂の門を潜るのは今が始めてゞある、聖堂の中は燻物の善き香、温い空氣で彼等の北風に凍えた身體を蘇生らせる、マグダレナは今迄覺えない善い心地に微笑して居る。
「兄さん、此處はいゝね、何時までも此處に居やう、……綺麗だなー、
と燈の輝く祭壇を指す、其前に多くの信者が拜んで居る。こはルベ市の有名なる聖女聖堂である。
小兒の聲、大人の聲、女男の聲が合して、歌つて居るのは、御誕生の歌であつて人に喜びと希望とを與へるものである、ヨハネは其詞に耳を傾けて居る、
貧しき者をば貴び給ひ、惱めるものをば慰め給ふ、神の子イエスは世に下れり、
世人の罪を贖ひて、長の生命を與へんと、
天下りましたる萬物の王！
賤しき厩に生れましゝ、其御惠のいや深き、

尊び仰げ世の人の暗きを照らす光をば

斯んな光景は二人の子供は初めて見た、珍らしい爲めに氣を取られて、饑渇を霎時忘れた、

「兄さん此處は王樣の内だねー、今人は歌つたよ」又小い聲で恐るゝものゝ如くに、

「此王樣にパンを貰はう！

其時多くの椅子に音がして信者は祈禱の狀態から椅子に着いた、說敎の段に上つた神父を見て一同は沈まつた、其靜粛なる堂の中に神父の聲は金線を彈くやうな調子で滿堂に波及する、傾聽して居る信者に「神の無限なる慈悲、イエズスキリストが我等人間を愛し給ふ其深き聖旨の事、我等罪ある者を憐み、窮するものを救はんとし給ふ思召」、なぞを秩序よき形式に說き聞かせる。なほ續いて「キリストが貴き神の御子なる御身を賤しき小屋の馬槽の中に御誕生なされたのも、多くの世の貧者を貴び給ふ思召からである」といふ語も加はつて居た。

又キリストの全能全善なることを想ひ起して見ると、其ユデア國を巡り給ふた時、多くの惱んで居るものを救ひ給ふた、さうして其人々を救ふために種々の不思議を行ひなされた、罪あるものは憐み、不具なるものは直し、病めるものは癒し、饑ゑたるものは救ひ給ふた、或る時キリストに從へる五千人の群衆に僅かなパンと魚とを分けて、其多勢皆滿腹したなどいふことは、神なる御力によりて、饑ゑたるものを救ひ給ふ證據である、話の概要は斯樣なことであつた。二人の小兒には元より其意味はよく解されはしない、併し此聖堂の王はよき心ある者であるといふことだけが會得出來た說敎が濟んで一同が跪いた時には二人も同じく跪いた、神父は靜かに主禱文を誦へる。

天に在す我等の父よ……異口同音に信者一同は答へる「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ」

祈の言葉の中でヨハネは自分の難義によく當つて居る此言葉だけを覺えた、「我等の

糧を與へ給へ」と口の中で云つて、妹の手を取つて、

「此人に一同はパンを願ふから、我等も一切位貰はれるかも知れんよ、

と二人顔見合せて笑つた、

祭が終つた時、門が明いて人々は出て行く、二人は失望して祭壇の方を凝視る、澤山な蠟燭を消す人があつて、次第に暗くなる、今人々の願つたパンを誰れも持つて來はしないのかと怪む、

大きな聖堂が空しくなつた時、二人は憶しながら奥まで進んだ、何を見ても皆目を奪はれるものばかりである、眞鍮の燭臺が光る、天鵞絨の椅子が美しく見ゆる、大理石の柱が彩色玻璃の光線を受けて輝く、小さい汚い家に住み習れた小兒は、夢の國に遊ぶやうな心地して居る。

祭壇の側に稍小さい室があつて、其處に蠟燭が附けてある、青い草で周圍を飾つて中央に藁を敷いて嬰兒を寢かせてある、二人は其方に目を附けた。

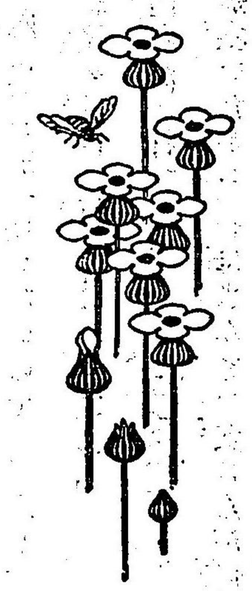
「彼れは王の子だらう

と指してヨハネはマグダレナにいふ、イエズスは厩の内に絶ゑず笑み給ふ、其伸し給ふ手は人を招くやうに見ゆる、マグダレナは叩頭をした、ヨハネは眞面目に脆いて、先刻人々が爲たのを見覺えて、手を合せて「我等の糧を與へ給へ」、と美しい嬰兒に向つていふ、嬰兒は藁の寢臺の上に動ずに居る、ヨハネはまた同じ願ひを繰り返す「我等の糧を與へ給へ、熱心は次第に其聲を高くする、マグダレナも兄について同じく祈る、二人の震ふ調子の言葉は空になつた聖堂に反響す、其響を耳にして怪みつゝ先刻説教をした神父は聖堂を覗き見られると厩の前に汚い小兒が居る、徐かに其歩を進めて小兒の後に廻つて襁子を見る、無邪氣な小兒の口から同じい熱心な願が出る、「我等の糧を與へ給へ」

爲父は其襁子によつて窮民の子であることを直ぐに知つた、一目見て彼等の心にある苦しみ、彼等の必要なるものを悟つた、近寄つてヨハネの肩を輕く打つて、

「小さい子供よ、そこに何して居ますか
小兒は喫驚して震ふた、顧た時初めて廣い聖堂に只二人だけ居つたことに氣がついて驚き恐れる、レネ神父はヨハネの戰くのを察して、
「恐れることはない、此處は神樣のところで、私も神の使だから、汝等は惠を受ける、
「パンを下さるか
とマグダレナは、司祭の柔和な顏を見て、遠慮せずに直ぐに問ふた、
「我が子供等よ、然程お腹が減つたか、
と懇に尋ねる、二人は司祭の方を見て答へないが其目色によつて司祭は知つた、非常に空腹して居るといふことを
「私に跟いてお出でパンを與るから
二人の子供は手を取つて、雀躍しながら司祭の後に從つて聖堂を去つた。

イエズスは神父に此子供のため二つの救を賜み給ふであらう……靈魂ささうして肉體を



（三）

神父は聖堂を出て自分の住居に二人を伴ひながら色々と問うて見る、此子供は未だ神の話を少しでも聞いたことがないらしい、神父は心の中に思ふた、「イエズスは私に此小兒等の爲めに二つの救を賴み給ふであらう、魂とさうして肉體を」と。

ヨハネは神父に向つて、聖堂に入つた時の心なぞを遠慮なく語る、

「あの綺麗なところへ這入る時には可怖かつたのです……エ、這入らうと思つて來たのではありません、餘り立派でしたし、人が皆這入るから這入て見やうと思つたんです、

「寒かつたからね

とはマグダレナの添へた言葉である、

「皆んな人はパンを願ひましたから、私も一しよにパンを願んだのです

とヨハネは神父の顔を見上げて、笑みつゝ物語る、

「坊やご覧ん、神様はお前の願を聞き容れて下さつた、私は神様に代理つてお前にパンをやる

神様は願ひするものを可愛がつて下さるよ、……お前のお母さんは神様の話をしないか

「エ、一度もしません、知らんのでせう、知つて居ればお母さんも神様にパンを願むはずです、二日前から内にパンが一切もないのです、米もないし火もありません、お父さんは手が痛くてお錢を儲けに行かれないんです、

「お母さんはお前等に何處かへ行つてパンを貰つて來いといひなさつたか

「イーエ、寒くてお腹が空いたから、お母さんとお父さんが何にか話して居るとき、

妹を連れて家を出ました、……來てよかつたです、神父様にパンを戴くことが出來ますから、

神父の住居に着いた、レネ神父は他の神父に二人の身の上を話して、「先づ此二人の饑ゑを癒してやつて、それから親のことを考へやう」と云つて、温めた牛乳に砂糖を入れて與へ白いパンを切つて食べさせる、小兒は喜んで牛乳を飲み干しパンをも飲むやうに食る、

「汝等は生れてから初めて神様に祈つたのだらう、何時までも神様が可愛がつて下さることを忘れてはならぬ、神様に感謝いひなさい

二人は喜ばしげに叩頭して、なほパンを食る、其中に神父は深い籠にパンや鷄卵や葡萄酒を入れた。

「坊や、これを以つてお歸り、これはイエズス様のお土産だといつてお母さんに渡しなさい……さうしてお前の内は何處か聞かしてくれ、明日はお父さんやお母さん

を見舞はう、……早く歸れ、内の者は心配して居るのだらう、……道が分るか

「眞直に歩いて來ましたから分ります、

二人は神父に別れて歸途に就いた、マグダレナも寒いとも云はず、疲勞たともいはずさつ〳〵と歩く、時々兄の提げて居る籠を壓へて見て笑顔を其兄に向ける、途すがら子供は今遭遇つたことについてばかり話す、

「彼の黒い着物を着た人は善い人だなー、

「ウン温い牛乳は甘しかつたよ

「綺麗な家だつたよ

「ウン立派だ

「お父さんやお母さんは喜ぶよ、早く行かう、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○○町にヤコブとルイズは子供が居ちない爲めに甚く心配して居る、二人の兄妹は時々〳〵默つて遊びに行くことはあるが、斯う迄長く歸らないことはない、また今日の寒さに空腹で何處に遊んで居るか、吹雪倒れでもして居るのでないか、又人に虐められて居るのではあるまいか、近頃のやうに不幸な事の續くときは又如何な不時の災難に遇ふかもしらん、と夫婦は心も心ならず、先刻からの自害話も引込んで了つた。

「ルイズ私が探しに行かう、お前は内に居れ、もしも歸つてくると……

其時遲し、階段に小さい跫音が聞える、笑ひ聲がする、母が起つて開けやうとすると戸はマグダレナの小さい手に押されて開いた、同時にヨハネの呀にくした聲が、

「只今歸りました

と響く

「マー子供といふものは幸なものだ

と夫婦顔見合せる、ヨハネは手に持つた籠を前に突き出して、

「お父さんやお母さんにパンや玉子を持つて來たよ、ソラご覽ん、
卓の上に其籠を上げる、ルイズは手早く其中を探つて見るとヨハネのいふ通り玉子やパンがある、籠の下に何かあるのにヤコブは目を附けて、取り上げて見たが、大きな封筒の中に五圓札が一枚あつた。
ヤコブは夢ではあるまいかと思つて、心を沈着けて見るに矢張夢ではない實物である、
「誰がお前等にこれを與れたか、私等が知り人といふ知り人を賴んで皆斷られたのに誰がお前達を憐れんで與れたか
「聖堂のイエズス樣だよ、私どもがパンを下さいといつたら下さつた
ヨハネの話に母は不思議に思ふ、
「聖堂のイエズス?」
此いぶせき室に其名を唱へるのは初めてゞある、ルイズは此小兒等が如何して其聖堂

を知つて居たかと不思議に思ふ、ヨハネは熱心に自分の喜びを父母に傳へる、
「お母さんもお父さんも、嬉しいでせう、先達町に見た黑い長い衣服を着た人ね、あれが私どもにイエズスの代理だつて此を下さつたの、……戸外があんまり寒いもんだからマグダレナと一緒に聖堂に這入つたんです、……黑い着物を着た其人がお前の内は何處だといつて明日見舞に行くつて云ひなさつたの
「神父が内に?、それは餘り不思議なことだ、子供に洗禮をも授けて置かないのに……神父は紡績の者のいふて居るやうな者ではないのかしらん、友達は神父なんぞ人を憐むものぢやないといつて居るが、
とヤコブは思案して居る、
「それは讒言でせう
と母は打ち消して、ヨハネに向つていふ、
「お前がパンを願つたら、神父は何ういつて下さつたか

「あのねー聖堂の中に澤山な人が大きい聲で何か言つて居たですが、私は其中でよく覺えたのは「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ」つていふんでした私もお腹が空いて居たから賴んだんです、さうして人が皆んな出て了つたけれども、マグダレナと私は藁の上に寢かせてあつた嬰兒の前で、「我等の糧を與へ給へ」つて百遍も賴んだのです、其時黑い服の人が來て、パンを遣るから此方へお出でつて、私等を聖堂の後の方の家に連れて行つて

「ソラさうして甘い乳とパンを澤山にね

とマグダレナは兄の話に附け加へた、

「さうして此籠んのも貰つたの、……神樣によ〳〵お禮を言へ、さうして何時までも神樣を愛せつて……

ヤコブ、ルイズは感心して聞いて居る、二人の顏には、今迄覆はれて居た曇が少し晴されて、薄いながら光がすこし見えた、二人は白いパンを食べて居る、ルイズは突然

パンを下に置いて、

「ヨハネ、今何う云つたかねー、日用の糧を……日用の糧を……、さう日用の糧を今日我等に與へ給へ」だね、些と待て今昔云つた祈を思ひ出すかもしちん、……何うだつたか餘り久しいので忘れて居る、

パンを手に持つたまゝ額に當てゝ考へる、

「ア、分るだらう、「天に在ます……

「お母さんさうよ、聖堂の人は然う云つたよ

とヨハネは側から口を出す、

「天に在ます我等の父よ、……さう〳〵御名の〳〵

「尊まれんことを」だよ

とヤコブの眠つて居た精神も覺たらしく、舊い記憶を思ひ浮べて、ルイズの後を續ぐ、

「御國の格らんことを」だらう、

「さうです〳〵、私は皆忘れて居てたゞ切れ〳〵に覺にて居るばかりです、餘り久しく唱へないものだから

「お母さん、明日彼の人が來てだつたら、よく敎はりませう、

母は答へに更へてヨハネを其膝の上に上げて、額に接吻した。

「以後此言葉は決して忘れん、私どもを救つた有難い言葉だもの

とヤコブはいひながら、また繰り返して其意を味ふ。

「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ」皆も忘れては不可ぞ。

闇路をさ迷うて奈落の底に沈まうとした此一家族に、惠みの光がほんのりと射し初めた、今までの恐しき考は、朝霜の融け行くやうに流れ出て、子供等一同と主禱文を誦へて、近來絶えて珍らしい安らかな眠に就いた。

「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ

信仰なき此夫婦も今は悟つた、窮して〳〵誰れ一人顧て呉れるものもなく、袖の

時雨て朽る時にも神の靈妙なる攝理によつて、其惱みから救ひ出して下さる、神の愛は何時も父の如くに弱きものゝ上に下るといふことを甚く畏く思つた。

(四)

昨日の風雪は止んで、寒氣は强いが、旭が美しく射入つて、軒には小鳥の囀る聲さへ賑しい、子供等は飛び起きて、昨日に變る活々した目で窓をあけ戸外を眺める、家にも木にも雪が積つて、其儘晴れた今朝の景色は銀の世界を玻璃で被ふたやうである其麗しきを眺めながら、昨日聞いた祈を二人して唱へる、マグダレナは雀躍して居る、昨日のことを思ひ出したやうに

「今日黑い服の人は來てかしらん

「來てちやらう……さー來てかしらん

とヨハネはいふ、父も昨日の喜びは餘りに過分であるから、長く續くことは難いと思つて、低い聲でルイズに向つて、

「神父も最早彼れ限りだらう、忘れて了つたらう、

と今日また來らんとする喜びを當にせずに居る。レネ神父は決して忘れなかつた、神の使としての善き司祭は人を愛する心深く、また魂の改心を熱心に思つて居るから、斯る人の身の上について心配して遣るならば、天國へむけての善き收穫があらうと考へた。

○○町の汚い二階にレネ神父の入つた時は丁度午後の二時を告げて居た、ヨハネとマグダレナは神父の方へ走つて行く、ヤコブは立つて恭しく神父を迎へた、此二階へ神父が入つたといふのはこれが始めてゞある、ヤコブは丁寧に挨拶して、

「神父樣よくお出下さいました、昨日は聖司のお蔭樣で我が一家族の生命を斯うして救つて戴くことが出來ました。

木炭澤山に盛り上げた火鉢を指して、

「昨日は最早凡ての術が盡きて了ひましたので、此上は死より活路はないと決心して、斯うして皆一緒に自害して了ふつもりでした、此炭さへもなくて、隣の內儀に寒いからといつて貰つたのです、

神父は恐しい罪惡を企てた物語に、神の聖旨を知らぬ罪の子を憐れに思ふ、ウエルニイの敢て出さぬ手を自ら握り締めて、

「我が友よ、神樣のことを知らないでしたか

「少しも知りませんで、畢竟神樣を忘れて居たのでございます

とルイズは夫に代つて答へる、ヤコブも恥しさうに、

「子供等にも神の話を聞かさずに育てました

「主人の親も私の親も宗教には無頓着でした、私ども二人とも洗禮は受けて居り

ますが、それだけで何も宗教の話は聞きません、

とルイズは話す、神父は

「初聖體をお受けなさつたか

と尋ねる、

「主人も私も受けません、一年の間私は童貞學校へ通ひましたけれども、まだ年がゆかない時でしたし一向其感化も受けませず、主人も或る行者の學校に少しの間參りました、けれども前申す通に兩親が何方も宗教に不熱心でしたから間もなく退學させました、私の親も主人の親も親密に交際して居ましたので、終に兩方とも官立の學校に入れられました、……其時は丁度私は此子位でしたでせう、

と（ヨハネを指していふ）それから後は誰れも神のことなど聞かせるものがなくて成長致しました。

「それではあなた方の子供は洗禮を受けませんですね

夫婦はハイといつて點頭いた、ヤコブは

「神父さん、實を申しますれば、私の働いて居ります紡績會社の友達は、失禮ながら僧侶といふものには注意せいと屢々いひますものですから終にさういふ説に感化て私は神父さんと交際することを嫌つて居りました、今私は誤つて居たことを悟りました

と笑ひながらに語る、

「全く讒言でございましたわ、神父さんのお蔭で私どもはパンを戴いて居ります、人のいふやうならば何うして斯樣な御親切を受けることが出來ませうか、

ルイズは婦人だけに涙ぐんで、かく喜びを表はすヤコブも首を上げずに感謝して居る、

「神父といふものゝ性質は將來益々よくあなた方に分りませう、司祭の取次によつて神が人を助けに來るといふことはよく分ります、昨日私は此二人の子供の祈つて居る方に遣はされたのは神樣の命令でした、子供等の神に願つて居たパンを私から

與へることが出來たやうな譯です、……あゝ我が友よ

と神父は一層の情を置めて

「あなた方の困窮のことを遺慮せずに、私に語つて下さい、神樣の慈悲によつて私はあなた方を知つたから、出來得るだけ力になつてあげたいと思ふのです

斯ういつて神父は二人の中央に腰掛を進めて、ウエルニィの一切の苦痛を聞いた、即ちヤコブの怪我したこと、長い間仕事の出來なかつた爲めに、次第に貯金も盡きて了つたこと、二三日中に拂はねばならぬ家賃の心配、などから家主のユデア人の人爲なども話した、特にルイズは家貧のことが第一の苦しみであると告げる、神父は一部始終聞きとつて、さてこれを救ふべき術を述べはじめる。

「私は慈善家の惠を汝等のために求めやう、お内儀さんも滌ぎ洗濯や臺所向の用事などすることを厭ひますまい、ろれで數箇所もよい所をお世話致しませう、さうすれば幾分の生計の補けにもなるし、私のお世話する内は皆信者の家であるから、あ

なたの病氣が直つて働の出來るまでは世話をして呉れるから心配なさるな、」

「ろれは誠に忝けないことでございます、お禮の申しやうもありません」

と夫婦の者は神父を伏し拜む、

「私にお禮は要ません、神樣に感謝して下さい、私は神樣の使人です、神に使はれて此處に來たのです、私を遣した御者にお禮を述べて、さうして又御恩を受けたといふ證據として……」ハイ〳〵分りました

とヤコブは神父の意を察して

「私どもが務を盡さなければなりません、また公教要理も學びます、ろれは確かに只今お約束致します、私は元より神父さんに反對する心は少もありませんでしたが、何にも知らないものですから、終に友達の惡口を信じました、これからは、斯樣な馬鹿げた話には心を動かされません、以後馬鹿なことといふものがありますれば、私はこれが直り次第健に打つてやります、

と吊つてある手を指していふ、
神父も笑へば、今まで穩しくして居た子供も笑つた、此實朴な言葉樣子によつて僞るものでないといふことが分つて居る、司祭は神の惠によつて、斯ういふよき魚を釣つたと非常に喜びを起す。
「神父樣からパンを戴いてお蔭樣で助かりました
ルイズは想ひ起してまた禮を述べる、
「あなた方の身躰のために少しのパンを上げましたが、人間は其パンばかりでは生きられません、まだ他に汝等の魂を綺麗に高尚にするパンを上げねばなりません
其パンは即ち御聖體で神樣の御身躰御血です、其魂の糧がないならば人は現世に安心して生活することが出來ません、汝等が初聖体を受けます時には汝等の心に魂の糧の功德が下ります、何卒善い覺悟を以つて此尊いパンを受けなさる時の來るやうに祈ります、汝等もよく御祈りなさい、

「私にも其パンをね……」
とヨハネが近寄つて來る、
「さう坊ちやんも、嬢ちやんも、父さんや母さんと一緒に其パンを戴きなさい、聖体の爲めに命までも捨てた小兒の話があります、或時教會が迫害にあつて多くの殉教者が出來た、殉教者等は死の前に於いても魂の糧を望んで居たから、密かに聖体を送つて此を受けさせた、其時に一人の少さい小兒が、聖体を捧げて殉教者の爲めに持つて行かうとした、すると他の悪い小兒は其聖体を奪はうと思つて石を拋げて其小兒をさん〴〵の目に遇はせた、けれども其小兒は信仰のあるもので聖体を汚すより死んだ方がましじやと思つて聖体を胸につけたまゝ伏して死んだ、といふ小い聖人もある、また追々に話して聞かせませう、今日は急くから……
と二人の小兒の頭を撫でながらレネ神父は席を立つた、ポケットから常に儉約して貯へた金弐拾圓ばかりを卓の上に置いて、また其側に公教要理と十字架とを添へてあ

つた、其公教要理と十字架を指して

「これは魂のためです、人間は迚も身体を養ふパンだけでは生きられないからね、其事をよく考へて下さい

夫婦のものは神父の足下に跪いて感謝した、ルイズは神父を見上げて

「神父さん此公教要理の中に、私の大方忘れて居る祈禱があるのでせうか、是非早く覺えなければなりませんから、

「何祈禱？

「昨日聖堂で聞きました祈禱です

とヨハネは先に答へた、

「さやうこの書物に主禱文もまた他の結構な祈もあります、其中に善き信者になる爲めの必要なことが種々あります、

ヤコブの手を握り母や小兒を祝し、寢臺の上に眠つて居る嬰子を撫でゝ司祭はウエルニィ一家族に別れて出た、見送つて室に戻ると父と母は更る〳〵二人の小供を膝に上せて

「あゝヨハネよ、マグダレナよ、よく助けてくれたお蔭で眞に嬉しいねー

昨日暗い〳〵海の底へでも引き入れられるやうな此家庭が、今日野越え山越え春の霞の棚引くなかへ出たやうに一家族皆浮き立つた、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

レネ神父の此新しい弟子は皆熱心に神の方に進んで神父に滿足を與へて居る、夫婦は怠らず公教要理を學び小供にも說き聞かせる、忙しい仕事の時間を割いて魂の糧なる神を受けることを勉める樣はなか〳〵に普通の人の及ばない程である。

四月の或るうらゝから天氣の日にヤコブ、ルイズの夫婦は初聖体を受けた、ヨハネ、マグダレナも父母と共に聖堂に行つた、此二人の小供も賢い性質で、よく宗教のこと

を父母から敎へられたから近い中にキリストの思召によつて聖体を受けるであらう、二人も今日は洗禮の秘蹟を受け嬰子も同じく神の子となつた、今〇〇町の破れ玻璃の中には神に屬する小羊ばかりである。

ヤコブの腕も全く直つて、前の通りに働いて其家族を養ふ、ルイズも神の爲めにと少しの暇をも家計の補助をするので、又次第に貯金も出來て過ぎし昔の苦痛は夢と去つて了つた、併し其苦痛は神の御手と縋がるべき行路の難であつたことを感謝して小供に至るまで忘れない、神の攝理の不可思議なることを畏み尊んで居る、毎日毎夜集つて十字架の下に祈禱を捧げる、實に床しい家庭となつた、皆主禱文を暗んじてこれを誦へるとき、或る願は一同取りわけて熱心に、其感じが聞くものにまで溢れる、その願は即ち

「我等の日用の糧を今日我等に與へ給へ」

である。

危難（終り）

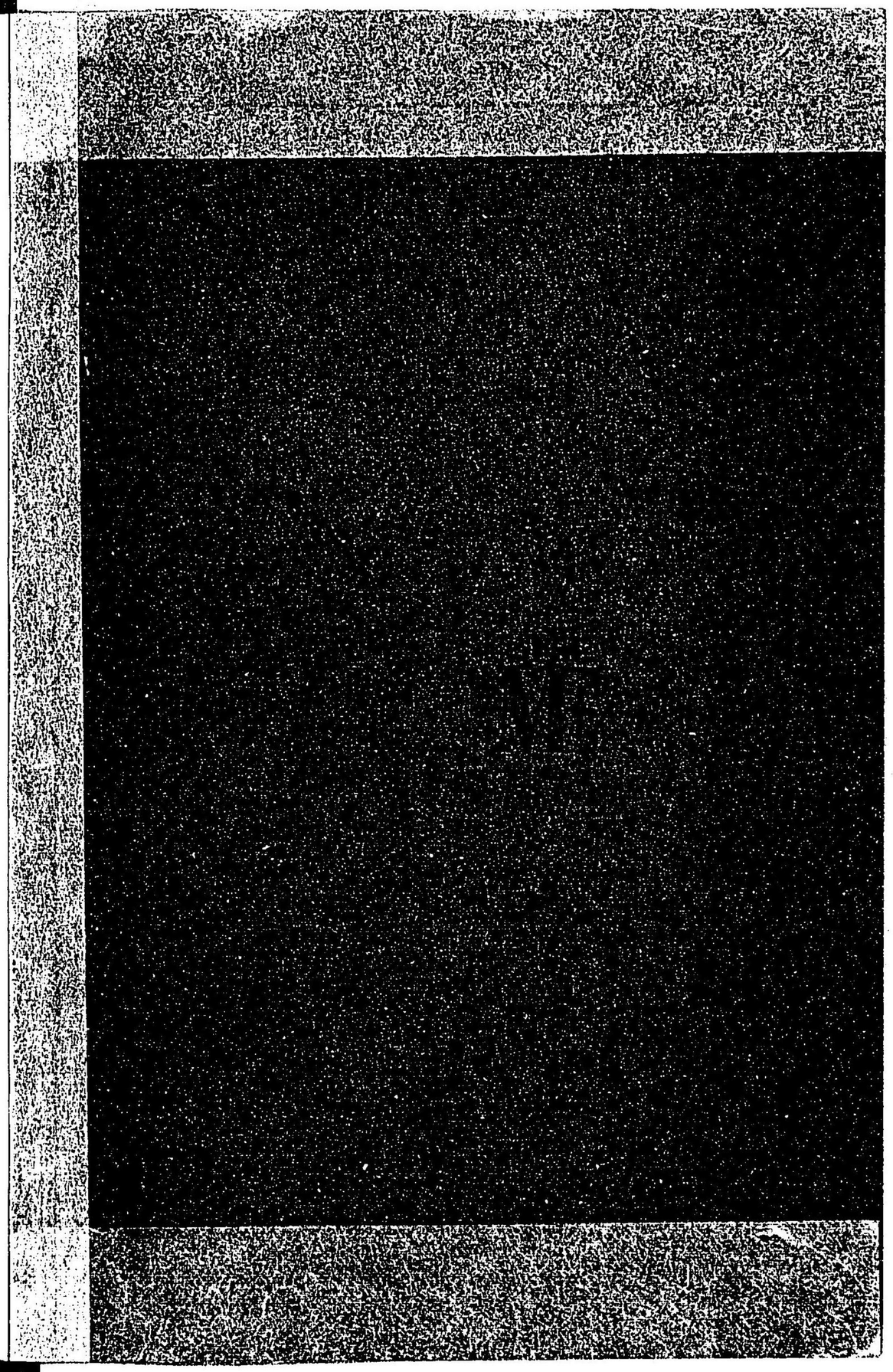
本書は主禱文を七篇に分ちて譯解したる短小說中の第四篇なり第一篇「花ちる里」第二篇「忘れがたみ」第三篇「寬大」既刊

複製不許

明治四十四年九月廿三日印刷
明治四十四年九月廿五日發行

大阪市東區左官町五百二十四番地
譯者兼發行者　聖若瑟教育院
代表者　杉山國司
仝所
印刷者　榎本良太郎
仝所
印刷所　聖若瑟教育院活版部
仝所
發行所　聖若瑟教育院

268
320



特50
428

危　難

国立国会図書館

020366-000-6

特50-428

危難

聖若瑟教育院／訳

図版

M44.9

ABI-0173